



# 埼玉キムチ新聞

第15号

2022年9月24日

販売会毎発行

(努力目標!)

kimuchi@saiai.net

## 『埼玉自由日記』・その②

### 家島朝鮮初級学校〜朝鮮学校版『二十四の瞳』?

#### ■島にあった朝鮮学校

家島朝鮮初級学校の存在を知った時の“衝撃”は今でも鮮明に覚えている。朝鮮学校の歴史は日本の敗戦後、在日朝鮮人がみずからの言葉や文化を取り戻すために自主的に設立した「国語講習所」が原点であり、時を経て学校としての体制を整えていった。朝鮮学校の問題に取り組む者として、それなりの知識は持ち合わせているとは思っていたが、まさか島に朝鮮学校が存在していた歴史があるとは想像すらしたことはなかった。

その学校は現在の兵庫県姫路市の沖合にある西島にあった。淡路島と、『二十四の瞳』の原作者である壺井栄の出身地である小豆島の間位置する大小四四からなる家島諸島の島の一つだ。元々は瀬戸内海の無人島であったが、一九二五年に採石のために朝鮮人が住み始めた。以降、朝鮮人が集まり始めて集落を形成し、やがて日本人も住むようになったとのことである。一九四五年八月十五日、朝鮮が植民地から解放された時点では一〇〇戸前後の朝鮮人が住んでいたと記録されている。

#### ■日本人児童も学んでいた!

日本にいた多くの朝鮮人がそうであったように、この島に住んでいた朝鮮人の多くも帰国の途についていたが、日本語しか話せない自分子ども達の言葉の問題が浮上した。やがて空き家の



1956年の家島朝鮮小学校の先生と学生

民族教育が始まった。一九四七年四月には、現在の朝鮮総連(民族団体)の前進団体である朝鮮人連盟の方針に従って、「磨朝鮮学院・家島分校」となった。この時点で教師一名、生徒三五名、修業年限を四年としていたのである。

家島朝鮮初級学校が他の朝鮮学校では見ることのできないもう一つの特殊性がある。それはなんとこの島に住む日本人児童も通っていたことである。一九四八年時点で、全校二七名の生徒中、五名が日本人児童であったという。隣の家島本島にある学校に通う船便がなかったこと、定期便が運航された後もその運賃を支払う経済的な余裕がなかった等の事情により、日本人住民の強い要望がその背景にあったとされる。

彼らには朝鮮語などの民族教科は行われなかったものの、自然に朝鮮語で話し、とある児童は自宅で「オモニ(母親)」、「アボジ(父親)」と呼んでいたという。弾圧と排外で語られることが多い朝鮮学校の歴史において、心がじんわりと温かくなる感覚になるのは私だけではないはず。(つづく)

#### ★埼玉キムチについて★

2010年度末、埼玉県は、「財務の健全化」を口実に埼玉朝鮮学園への補助金の支給を打ち切りました。また、埼玉県議会は2012年に「拉致問題が解決するまで補助金の支給を行わない」という附帯決議を行いました。これは朝鮮学校に通う子どもたちとは何ら関係のない外交政治上の理由を持ち出すことによる不当な差別に他なりません。2018年度に県が財務状況について、「健全性が確認できた」と学校に通達した後も支給停止は続いています。このような非常に厳しい状況の中、埼玉キムチは少しでも学校運営に寄与するため、“利益全額カンパ”の活動を行っています。美味しいキムチとともに、朝鮮学校支援の輪が広がりますよう、ご協力よろしくお願ひします。

★裏面は「誰もが共に生きる埼玉県を目指し、埼玉朝鮮学校への補助金支給を求める有志の会」主催の「第7回公開学習会」の案内チラシです(遠方の方、すいません!)。是非、お越しく下さい!